

11月の研究会では、10月に横浜文化賞を受賞したばかりの内海孝先生からご講演をいただきました。

「原合名会社 —その全体像と歴史的意味—」

内海孝（原三溪市民研究会顧問・東京外国語大学教授）

2010年11月13日（土）14:00～16:00

ちょうど1年前の11月13日に、『原三溪翁伝』（藤本實也著）出版感謝の集いが開催されました。そのとき内海先生はアメリカに滞在していたため、内海先生から電子メールで届いた挨拶を猿渡さんが代読されたことが懐かしく思い出されます。半年間にわたるアメリカでの研究の成果を交えてお話を伺いました。

【講演から一部を紹介します】

『原三溪翁伝』813ページの表3には、明治36（1903）年の横浜における生糸輸出の、米国向けで61%、欧州向けで95%が外国商人によって扱われていたことが示されています。外国商人の占める割合は、明治32（1899）年の居留地廃止以来だんだんと減っていきます。また、明治42（1912）年を過ぎると欧州向が米国向に転換されていきます。同じく814ページの表4は、昭和17（1942）年にニューヨークに



あった日本企業と社員数を示していますが、原合名会社はこのとき、社員3名をニューヨークに置いていました。なぜ、日米開戦後も米国に日本企業が存続していたのでしょうか。当時の駐米大使で後に東京外国語大学学長になった澤田節蔵は、「生糸の対米貿易は太平洋上の平和を維持する大切な要素だ」と述べました。また、ニューヨークにやってきた今井五介は「絹は無言の遣米大使、綿は無言の米国駐日大使」と述べました。当時の経済人の興味は、日米開戦回避にありました。

また、戦争回避の動きは貿易だけではありませんでした。少し時代を遡ると、米国における排日運動を和らげるために日本人の手によってニューヨーク日本図書館が作られています。これは昭和6（1931）年の満州事変をきっかけに、日本研究の必要性を感じたアメリカ人によってコロンビア大学に移管されました。また、日米関係に腐心したのは日本人ばかりではなく、日本生れのニューヨーク人もいましたが、その人物は今回の調査によって横浜生まれであることが確認されました。そのほか当時のニューヨークには、日本での生糸の一大産地であった群馬の群馬県人会や、明治時代の横浜にもいましたが原合名とほぼ同時にニューヨークに進出したインド商人もいたのです。

★研究会のあとに内海孝先生を囲んで祝賀会を開催しました。

内海孝先生「横浜文化賞受賞」祝賀会

場所：ブリーズベイホテル 3階「フリーセント」

日時：2010年11月13日（土）17:00～19:00

